

前川健一著

## 『明恵の思想史的研究』

——思想構造と諸実践の展開——

(法蔵館・二〇一二年)

### 松尾 剛次

近年の仏教研究の特徴の一つに、いわゆる旧仏教研究の隆盛が挙げられる。かつては、貞慶、明恵、叡尊、忍性らについては、旧仏教の改革者として位置づけられ、正面きった研究はさほど行われてこなかった。

しかしながら、七〇年代に提起された黒田俊雄氏の顕密体制論によって、旧仏教の重要性に大きな光が当てられて以後、いわゆる旧仏教研究が大いに前進したことは否定できない。ただし、黒田氏の研究には、私は大きな問題があると考えている(拙著『鎌倉新仏教の成立』吉川弘文館、一九八八参照)。

本書は、そうした研究動向を踏まえて、いわゆる旧仏教者の一人とされてきた明恵に注目した研究で、二〇〇二年に東京大学に提出された博士論文がもとになっている。明恵については、近年、『夢記』などが大いに注目され、比較的数量多くの研究の蓄積があるが、本書ではとりわけ思想に焦点が絞られている。

私は日本仏教史が専門であり、思想史の方は得意ではない。そういう私でも、本書が、最近大いに注目を集めている明恵の

思想の全体像を明らかにしようという野心作であることは明らかであり、ここで書評することにする。

本書の構成は以下の通りである。

序論 明恵研究の課題と本研究の目的

第一部 明恵思想の教理的枠組み

第一章 文覚・上覚と明恵

第二章 景雅・聖詮の華嚴学と明恵

第三章 貞慶と明恵

第四章 明恵の密教思想

第五章 明恵の教判節

第二部 明恵に於ける諸実践とその基本理念

序章

第一章 初期の教学的・実践的関心

第二章 『華嚴唯心義』の『大乘起信論』解釈

第三章 『摧邪論』の思想

第四章 明恵に於ける宗密の受容

第五章 仏光観の意義

第三部 明恵の戒律観

第一章 明恵に於ける不淫戒の問題

第二章 修法から受戒への移行

第三章 『梅尾説戒日記』について

第四部 明恵『夢記』とその周辺

第一章 明恵の羅漢信仰

## 第二章 明恵の善妙説話

### 第三章 『溪風拾葉集』に於ける明恵説話

#### 第五部 明恵以後の展開

##### 第一章 日本華嚴宗に於ける明恵の位置づけ

##### 第二章 高山寺教学の展開

#### 結論

#### 付録(資料紹介)

すなわち、五部立てで一九章より構成されている。

第一部では、明恵の師匠や同時代の仏教者との対比から明恵の教学の特色を明らかにしている。すなわち、思想における教理の理論的一貫性を重んじる明恵の姿勢が明らかにされている。

第二部では、明恵が試みた様々な実践がどのような一貫性を有していたのかを、「人法二元空三」の概念を手がかりに論じている。

第三部では戒および説戒の活動が明恵思想の中でどのような位置づけを有するのかを考察している。明恵は、死後に「一生不犯」の僧という伝説が生まれるほど持戒堅固な僧であったが、それが彼の仏光観などどのような関係にあったのかを論じている。第四部では、『夢記』と明恵思想との関係を扱っている。

第五部では、明恵の思想がどのように継承されていったのかを扱っている。具体的には明恵の高弟である喜海の思想を考察し明恵以後の高山寺教学の動向を明らかにしている。

以下、各部・各章ごとに紹介しよう。

第一部第一章「文覚・上覚と明恵」では、明恵の伝記である

『高山寺明恵上人行状』などを読み直して、文覚・上覚と明恵との関係が明らかにされている。明恵は神護寺において修行した。当時、神護寺は文覚のもとで復興されつつあった。明恵は叔父であり、かつ文覚の高弟であった上覚のもとで仏教を学んだ。

本章で、大いに注目されたのは、密教僧としての明恵である。明恵は「厳密」という華嚴と密教を融合した思想の持ち主とされるが、本章で、上覚らによって密教を修学したことがわかる。とりわけ、『古今著聞集』などによって、九歳から一三歳ぐらゐまでは仁和寺守覚のもとで密教を学んだのではないかという興味ぶかい仮説を提起している。

第二章「景雅・聖詮の華嚴学と明恵」では、明恵と華嚴との関係に注目している。明恵思想の中核に華嚴教学があることは周知のことである。本章では、明恵がいかに華嚴教学を学び、その特徴がなにかを論じている。明恵は、仁和寺在住時代に景雅の華嚴に触れ、以後は華嚴関係書籍の書写を通じて華嚴を学んだという。とりわけ、東大寺の聖詮が華嚴を教え、図書の借用の便宜をはかったという。

従来、東大寺の華嚴と明恵の華嚴とは、明恵の方が実践的だという相違がある、とされる。しかし、それははっきりとせず、本書では、教相判釈などで相違があるように、明恵が極めて理論的な整合性を求めていることを明らかにしている。

第三章「貞慶と明恵」では、貞慶と明恵の關係に注目している。明恵は貞慶を尊敬し、春日権現の託宣によって貞慶を訪問している。ところが、貞慶の死後は、貞慶に対して批判的となった。その背景には往生論の相違があるとする。

第四章「明恵の密教思想」。先述のように、明恵は、華嚴教学と密教とを融合する「嚴密」の僧として知られている。しかし、明恵思想における華嚴教学と密教兩者の關係についてははっきりしていなかった。その關係について、本書では『真聞集』などの弟子による聞き書き資料を使い、明恵は華嚴教学と密教との一致を主張していたという。たとえば、密教の大日如来と『華嚴經』の盧舍那仏とは同一であるとする。さらに、明恵の「嚴密」とは、密教を華嚴教学によって理解し、その密教を華嚴教学の実踐化のために利用するという往還運動として理解することができる。

第五章「明恵の教判説」。明恵は、どのような教相判釈（教判）説を持っていたのであるか。『摧邪論』によれば小乘、三論宗、法相宗、天台宗、華嚴宗、真言宗という順番の教判説を有していた。それは、空・不空説に基づく判釈だという。また、明恵は顯教（ここでは華嚴宗）と密教については、教理的には同一であるが、事相の面では、密教が優位であるという。というのも、顯教は、身・口・意の三業において、意業のみなのに、密教は意業のみならず身・口の三業に亘るので優れているとする。

第二部序章では、明恵の諸実践を貫く比較的一貫した理念として、「仏道修行とは、衆生に内在する真如を人法・二空の証得により顯現させることであり、完全に顯現したのが仏である。」この理念を前提にしてこそ、仏光親が明恵の実踐の最終的帰結である意義も明らかになる、とする。

第一章「初期の教学的・実践的関心」。明恵は、文治四（一一八八）年の一六歳頃には、人無我に目覚めていたが、觀法といたった実践に入るのは、建仁一（一一二〇）年ころで、その頃、『大乘起信論』を実践的な枠組みとして採用したという。

第二章「華嚴唯心義」の『大乘起信論』解釈。『華嚴唯心義』は、建仁一年、明恵二九歳の時の著作である。紀州の女房たちのために書かれ、六〇卷『華嚴經』「夜摩天宮菩薩偈讚品」の「唯心偈」を解説したものである。

本章では、明恵の『華嚴唯心義』における『大乘起信論』の「真如」概念などに注目している。明恵は、法身（真如）が衆生になったのではなく、衆生の本質は法身であるが、無明に基づく妄想によって衆生として現象しているという。真如と無明では存在論的に性格が異なり、前者は実在であるが後者は仮象であり、前者が完全に顯現した後は後者が存在することはない。それゆえ、真如が無明と和合しているのは衆生においてのみで、仏においては真如が独存しており、再び無明と和合することはない。ようするに、仏の絶対性を主張するが、それは明恵の強烈な釈迦信仰に基づくという。

第三章「『摧邪輪』の思想」。『摧邪輪』は、法然の『選択本願念仏集』を批判した書として知られる。その批判の要点は「菩提心を撥去する過失」と「以聖道門警群賊過失」の二つである。とりわけ、明恵は「菩提心を撥去する過失」を集中的に批判する。それは、法然が、戒律や座禪といった諸行にも菩提心が含まれているのに否定したからである。

このように『摧邪輪』の中核的な思想には「菩提心を撥去する過失」批判がある。前川氏は、明恵のそうした考えを菩提心を「本(本地)」とする本覚思想として理解する袴谷憲昭説を批判する。すなわち、明恵にとつては、真如の方が「本(本地)」であり、菩提心は迹であるという。

また、「以聖道門警群賊過失」では、聖道門を総体として群賊にたとえる法然の立場は、多様な機根に対応した諸宗併存の和合を理想とする明恵の考えと対立し、仏法の衰亡のみならず国土の災厄さえ招くものであったがゆえに、明恵は批判したという。

第四章「明恵に於ける宗密の受容」。明恵は、仏光観に至る以前は『円覚経』に基づく観法を行っていた。明恵は、『円覚経』において、「本来成仏」や円覚性についての教説と法報不分の仏身観を重視するが、これらには宗密による『円覚経』解釈が影響を与えているという。しかし、それらは宗密の説そのままではなく、明恵独自の解釈によって改変されているという。すなわち、「本来成仏」は、三生成道や三祇にわたるといった

伝統的な修行論と結びつけられ、法報不分の仏身観は密教の法身説法の問題と関連づけられているという。

第五章「仏光観の意義」。明恵は承久二(一二三〇)年四八歳頃から仏光観を開始する。仏光観は、『華嚴経』「光明覚品」及び李通玄の所説に基づき、盧舎那仏の足下から発する十方を照らす光を十重に観察する観法である。著者によれば、仏光観にいたる明恵の諸実践は、人空二空による真如の顕現という理念に導かれたものであったという。明恵においては、真如が衆生に内在することは衆生と仏とが同一だということを意味するものではない。修行の結果としての成仏の可能性を約束するものであった。そのうえで、人法二空の実現のために、観察主体たる心そのものを空と観ずる仏光観がさまざまな試行錯誤の末に選ばれたと主張する。

第三部第一章「明恵に於ける不淫戒の問題」。明恵は、死後「一生不犯」の僧として知られる。明恵は戒律、とりわけ不淫戒を重視し厳格に守っていた。それは、仏光観の実践に励む中で自覚された自己の不浄性やそれにもなう戒律への関心の高まりがあるという。また、高山寺の運営にあたっては、戒律は中心におかれ、持戒堅固の宗風が確立していた。こうしたことを踏まえて明恵「一生不犯」の僧説が生まれたという。

第二章「修法から受戒への移行」。明恵は、病氣治癒祈禱などで効果のある験者としても知られていた。すなわち、密教的な祈禱によって多くの人々の病氣治癒にあたっていた。ところ

が、『摧邪論』を著し、法然の専修念仏説の批判を契機に戒律を重視し、戒師を勤めるようになっていった。とりわけ、『梵網經下』の戒を重視した。

第三章「梅尾説戒日記」について。『梅尾説戒日記』というのは、梅尾高山寺における明恵の説戒について弟子長円が記録したもので、明恵最晩年の思想を伝える。その時期の思想の特徴として、以下の三つを挙げる。一つは、結縁の思想で、死後にもわたる結縁の功德が説かれている。第二には、文意とのつながりであり、第三に天台円頓戒との関係が注目される。

第四部第一章「明恵の羅漢信仰」。明恵は生涯にわたり自分の見た夢を記録した。本章では、建久一〇（一一九九）年四月一八日付の『夢記』を使って、明恵の羅漢信仰を分析している。とりわけ、建久一〇年四月一八日付の夢は、明恵に大きな感動を与えた。それによって、明恵の羅漢理解に大きな影響を与えた。それには羅漢の示現に対する確信であったり、羅漢を菩薩の垂迹と見る考えがあるという。

第二章「明恵の善妙説話」。本章では、承久一（一二三〇）年五月二〇日付の夢を紹介し、明恵の夢では女性の願力という要素は希薄であり、他方、明恵の高徳だけが強調される結果になっているとする。

第三章「『溪風拾葉集』に於ける明恵説話」。『溪風拾葉集』の明恵説話の特徴は、『梅尾明恵上人伝記』と比較すると、密教者としての明恵をとらえる説話にあるとする。

第五部第一章「日本華嚴宗に於ける明恵の位置づけ」では、従来は、明恵は異端で、東大寺の凝然が正統とされてきた。しかし、凝然は遁世した律僧であり、官僧ではないために公請に参加できない。そうした凝然の華嚴教学が、中世において正統ではなかったことを明らかにしている。

第二章「高山寺教学の展開」。本章では、明恵の弟子である喜海の思想を、『起信論本疏聴衆記』を通じて明らかにし、明恵以後の高山寺教学の展開を見ている。従来、明恵以来の高山寺教団は実践的と考えられてきたが、実は、観照的な性格が強かったのではないかとする。

最後に、「付録」として、これまで全体の紹介がなされてこなかった、明恵が神護寺内納涼房で『菩提心論』を講義した際の聞き書きである『納涼房談義記』と未翻刻であった『神護寺如法執行問答』の翻刻・紹介がなされている。

以上、本書の内容を紹介してきた。これまでの紹介で明らかのように、本書によって明恵思想の全体像がかなり明らかになったといえよう。とりわけ厳密と言われる明恵の核思想については、華嚴教学と密教の関係などが明らかとなったといえよう。その意味で、明恵研究の際の必読書といえよう。

ただ、最後に一つだけ述べさせていただと、多くの部分で難解な仏教用語が何の説明もなく使われており、少し閉口させられた。博士論文であれば、専門家しか読まないものでそれで良いにしても、本として刊行する際は、読者へ配慮して、補注を

つけるなど難解な仏教用語をわかりやすく説明するなどの配慮がほしかった。

(山形大学教授)

市來津由彦・中村春作・田尻祐一郎・前田勉編

## 『江戸儒学の中庸注釈』

(東アジア海域叢書、汲古書院・二〇一二年)

高山 大毅

—

「これからは東アジア全体に視野を広げた思想史研究を」——このような提言が常套句になって久しい。島田虔次の「儒教史、朱子学史というものも、中国・朝鮮・日本（・ヴェトナム？）を通じての通史として、まず、書かるべきであると思ふ」という言葉（『朱子学と陽明学』岩波書店、一九六七年）から既に半世紀に近い月日が経っている。提言に止まらない、重要な知見をもたらした研究も既に存在する。「東アジア」を視野に入れた思想史研究が、問題設定の新鮮さや壮大さだけで、一定の評価を得られる時代では最早ない。

近年、東アジア諸地域の儒学を比較思想的な見地で取り上げるプロジェクトや国際シンポジウムが一層盛んになっている。これらの試みが、研究者の知見拡大に貢献しているのはいうまでもない。しかし、この種の企画が壁にぶつかっているような印象はないだろうか。彼我の儒学史の隔たりや、研究風土の相